

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3158 号 2016.7.31 発行

華麗なる切断ヴィーナス パラ選手らファッションショー 朝日新聞 2016年7月30日  
ポーズを決める大西瞳さん（中央）ら義足のモデルたち=30日午後、石川県中能登町、井手さゆり撮影



9月に開催されるリオデジャネイロ・パラリンピック



を前に、義足のアスリートらによるファッションショー「切断ヴィーナスショー」が30日、石川県中能登町で開かれた。障害者陸上（100メートル、走り幅跳び）日本代表の大西瞳さん（39）

を前に、義足のアスリートらによるファッションショー「切断ヴィーナスショー」が30日、石川県中能登町で開かれた。障害者陸上（100メートル、走り幅跳び）日本代表の大西瞳さん（39）

もモデルで参加。障害を越え、等身大の自分である喜びを表現した。

ショーは、障害者につきまとう否定的なイメージを払拭（ふっしょく）したいと、写真家の越智貴雄さん（37）が、2015年から各地で開いている。同町は繊維業が盛んなことから、場所や衣装の素材を提供した。

モデルたちは義足の美しさを強調したドレスをまとうてステージを歩いた。世界的に有名な素材「天女の羽衣」のドレスを着た大西さんは「今日はテンションが上がりました。このテンションで、リオでメダルを取りたい」と笑顔を見せた。（井手さゆり）



### 「政策分類」で問題提起 日本総研の広瀬氏

大阪日日新聞 016年7月31日

参院選後の経済政策のありようについて、三井住友銀行系シンクタンク日本総合研究所の広瀬茂夫氏（56）が、成長戦略を重視した「政策の分類」をまとめた。医薬・医療機器産業が集積する関西圏のポテンシャルを踏まえた「健康・長寿分野の先導」を重要度の高い政策に位置づける一方、リニア新幹線の大阪延伸の最大8年前倒しを含む「交通ネットワークの充実」を低くした点などが特徴。政策分類が意味するところは何か。広瀬氏に聞いた。

広瀬氏は同研究所の関西経済研究センター所長を務めており、今月25日の在阪記者との懇談会で政策分類を示した。重要度を縦軸、難易度を横軸にした政策分類には40項目の政策を配置している。その中で特徴的な政策をピックアップしたのが図表だ。

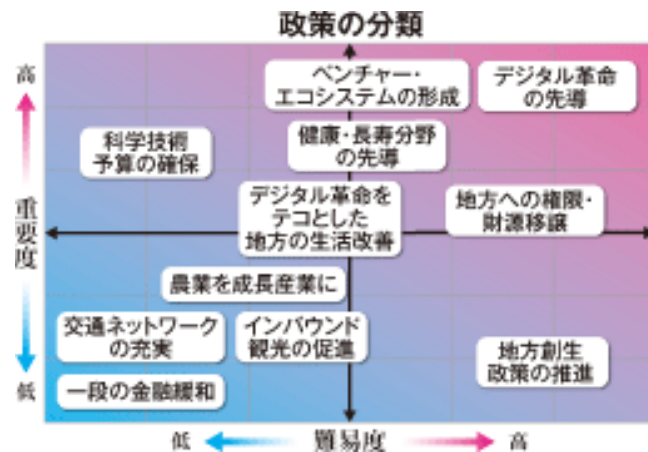
過去の実績に基づいた「フォアキャスト型」の政策は難易度が低く、逆に、将来を見据えた「バックキャスト型」の政策は高くしている。その狙いについて、広瀬氏は「日本は成功体験を積んできたため制度を変えることは難しいが、時代遅れの制度もある」と説明。その上で、参院で27年ぶりに自民党単独過半数を回復した安倍晋三首相の政権基盤が安定していると捉え「長期の大戦略」を提案した。

健康・長寿分野の先導は、医薬・医療機器産業にスポーツ用品や美容家電などの関係業界を加えたもので、その政策推進に向けた「科学技術予算の確保」も重要度の高い政策にした。先史時代の農業革命や18世紀の産業革命に比肩するとされる「デジタル革命の先導」をはじめ、関連する小型無人飛行機（ドローン）や自動運転機能の活用を視野に入れた「デジタル革命をテコとした地方の生活改善」の重要度も高い。

リニア大阪延伸の前倒しについては、そのベースになるスーパー・メガリージョン（巨大都市圏）の形成から「何が生まれるか見えない」と指摘し、大阪延伸に伴って東京圏に吸い取られる負の側面を懸念した。「一段の金融緩和」については円安株高の効果があつたものの「通貨の信用を失いかねない」としている。

安倍政権が掲げる「地方創生政策の推進」を巡っては地方の「補助金漬け」を懸念する一方、難易度の高い「地方への権限・財源移譲」の重要度を高く位置づけている。

広瀬氏の提案は、難易度の高い政策ほど重要度も高く、本腰を入れた対策を迫った格好だ。政府の新たな経済対策が閣議決定される8月2日を前に、問題提起したと言える。



## 被災障害者の支援確認 阿波の福祉避難所が大地震想定し訓練



徳島新聞 2016年7月31日  
施設通所者（右端）から被災状況などを聞き取る参加者＝阿波市市場町の障害者支援施設「すみれ園」

大規模災害発生時に要援護者を受け入れる福祉避難所の運営訓練が30日、阿波市市場町香美の障害者支援施設「すみれ園」で行われ、県東部9市町の社会福祉協議会などの関係者約200人が被災した障害者の支援の進め方などを確認した。

阿波市を震源とする大地震が発生し、福祉避難所である「すみれ園」に被災者を受け入れるという想定で実施した。

熊本地震の避難所支援に当たったNPO法人さくらネット（兵庫県）の石井布紀子代表理事（50）のアドバイスを受けながら、参加者は被災者役の施設通所者15人に聞き取りした。家族構成や被災状況を確認したほか、移動や食事、入浴など6項目について支援の必要性を9段階でチェックし、一般避難所や福祉避難所などに振り分けた。

続いて意見交換会が行われ、石井代表理事は避難先を選択する際のポイントとして「普段から受けているサービスの内容をよく聞いて判断することが重要」などと指摘した。

訓練は、熊本地震を機に福祉避難所の在り方や振り分けるノウハウを共有しようと、阿波市社協が初めて企画した。

## 息子の笑顔返して 相模原殺傷、重傷者両親「人を人に見ぬ犯行」

中日新聞 2016年7月31日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で十九人が刺殺され、二十六人が重軽傷を負った事件で、大けがをした男性の両親と元職員の女性が取材に応じた。思い出の写真や小物を見つめながら、入所者にとってかけがえのない場所を踏みにじった凶行への怒りをあらわにした。

「パン食い競走や玉入れをしたの。良い顔をしてるでしょう」。重傷を負った森真吾さん（51）の母親で、同市内に住む悦子さん（79）は、十六年前の園の運動会で父親の正英さん（82）と三人が写った写真を指さし、和やかな表情を浮かべた。知的障害がある真吾さんは職員に連れられて行くドライブが大好き。「ゆっくりだけ成長する姿を見せてくれた。いとしい息子です」

二十六日未明、やまゆり園に植松聖（さとし）容疑者（26）が侵入。真吾さんも胸や首を刺され、病院に搬送された。

意識不明の重体。両親はベッドに横たわる真吾さんの手を握り締めた。二日後に意識を取り戻し、今は「パパとママだよ」と呼び掛けると、弱々しく手を握り返し、応えてくれる。ただ、自分たちをはっきり理解できているか、まだ分からない。

「事件前の状態に回復できるのだろうか」と正英さん。「人を人に見ない犯行で、本当に許せない」

神奈川県警は死傷者の氏名を公表していない。森さん夫婦は真吾さんの名前も含めて、実名での紙面掲載を了解した。

草木染のウサギの人形、布製の写真立て、猫の形のクリップ。やまゆり園の近くに住む元職員、甘利ミツ子さん（74）の自宅には、入所者がくれた手作りの小物が大切に飾られている。

約四十年、重度障害者の介助を担当。「ママ」と慕ってくる甘えん坊、普段は無口なのに、甘利さんが休むと「どこに行った」とへそを曲げる寂しがり屋。「障害者」の一言でくれ

ない個性があった。退職後も夏祭りなどで、招待する家族のいない入所者と模擬店を回った。

事件の日は、遺体を乗せたとみられるワゴン車が何台も自宅前を走り去った。「誰にも迷惑を掛けずに暮らしていた人たちなのに」。理不尽さと同時に「なぜ事件に至ったのか」という疑問が胸に広がる。

事件は大きな衝撃を与えたが、やまゆり園は入所者のよりどころだ。「今まで通りの園に立ち直らなきゃいけない」（酒井翔平、谷岡聖史）

### 「障害者生きる権利」 相模原犠牲者に黙とう 旭川で育成会大会



北海道新聞 2016年7月31日  
相模原市で起きた障害者施設殺傷事件の犠牲者に黙とうをささげる参加者＝30日、旭川市民文化会館

【旭川】知的障害者の家族らでつくる「北海道手をつなぐ育成会」の第61回全道大会が30日、旭川市内の3会場で始まった。相模原市の障害者施設殺傷事件の犠牲者に黙とうがささげられたほか、主催者から事件の再発防止を求める声が上がった。

旭川市民文化会館で行われた大会式典で、北海道手をつなぐ育成会の奈須野益（ゆたか）会長は「どんな障害者も生きる権利がある。卑劣な事件を再び起こさぬよう、社会全体で再発防止を考えたい」と訴えた。

全国組織である全国手をつなぐ育成会連合会は事件翌日の27日、「私たちは全力でみなさんを守る。安心して堂々と生きて」と障害者を励ますメッセージを発表した。来賓の久保厚子同連合会長は「全国の当事者や一般の人から『同じ思いです』といった反響が数多く寄せられました」と報告した。久保会長は「障害者が安心して暮らせる社会が必要」と話し、支援事業にさらに力を注ぐ考えを示した。

大会には全道から約500人が集まり、31日まで障害者の権利擁護などをテーマに話し合う。

### 相模原・障害者殺傷／共有すべきだった大麻情報 河北新報 2016年07月31日

19人の障害者の命が奪われた相模原市の殺傷事件は、神奈川県警の捜査などが進むにつれて、犯行までの経緯や犯行時の状況が次第に明らかになりつつある。

犯行現場となった「津久井やまゆり園」で植松聖容疑者（26）は、複数の障害がある入所者を刃物で刺していたという。「重複障害者が生きていくのは不幸だ」と供述したというから言葉を失う。

植松容疑者は社会的に到底受け入れられない異常な考えを抱いていたばかりか、実行に移した。

なぜ、犯行へ突き進んでしまったのか。負傷者を合わせ被害者は45人にも達したことを考えると、わずかではあっても防ぐチャンスがなかったのかどうか、検証は欠かせない。これからの対策にもつながるはずだ。

差し当たって、措置入院中に発覚した大麻の問題は検証の材料になるだろう。植松容疑者はことし2月19日から3月2日まで入院した。

やまゆり園の職員に「重い障害者は安楽死させた方がいい」と、常軌を逸したことを話したことがきっかけになった。やまゆり園は警察官にも立ち会ってもらって面談したが考えを変えようとせず、措置入院になっている。

精神保健福祉法によって、本人の同意がなくとも強制的に入院させるのが措置入院。他人に危害を与える可能性があるような場合、知事や政令市の市長が判断する。

ちなみに宮城県では、昨年度1年間の措置入院は170件。前年度より39件増えている。きっかけは「ほとんど全て警察からの通報」（障害福祉課）だという。

「犯罪予防」が重視されているとみられるが、極めて慎重な運用が求められるのは言うまでもない。

植松容疑者のケースで特異なのは、措置入院の間に大麻の陽性反応が出ていたこと。「大麻精神病」などと診断されていた。

大麻はもちろん禁止薬物であり、大麻取締法で所持や譲渡、栽培は刑事罰の対象になる。使用（吸引）はなぜか罰則規定がないが、無論使っていないわけがない。

ところが、大麻の陽性反応の件は入院先の病院と相模原市、神奈川県警などとの間で情報が共有されなかった。もし共有されていたら、自宅を搜索されても不思議はなかったはず。使用したのであれば所持も疑われるからだ。

事件後の搜索で植松容疑者の自宅から大麻が見つかったが、もっと前に所持が発覚する可能性もあったはずだ。

大麻の陽性反応が出て影響が疑われた時点で、行政や家族らが話し合いの場を持ち、改めてその後の対応を探るべきではなかったか。

措置入院は人権を損ないかねない非常手段。理由もなく長引かせることは許されないが、入院中に犯罪行為につながるようなことが明らかになったら、退院前に対策を講じることも必要だろう。

大麻の陽性反応は重大な状況の変化だった。対応を練り直すきっかけになったはずなのに、肝心の関係者が情報を共有していないのでは実現しようがなくなる。

#### 障害者施設殺傷事件 パラリンピック代表選手も献花 NHKニュース 2016年7月31日



相模原市の知的障害者施設で入所者が刃物で刺されて19人が死亡、26人が重軽傷を負った事件で、現場に設けられた献花台には、31日にリオデジャネイロパラリンピックの代表選手も訪れ、犠牲者を悼んでいます。

相模原市緑区の津久井やまゆり園の正門前に設けられた献花台には、事件から5日たった31日も多くの人たちが訪れています。

このうち午前中は、リオデジャネイロパラリンピックの競泳に出場する成田真由美選手が訪れ、花を手向けて犠牲者を悼んでいました。成田さんは「犠牲になった人たちは抵抗することも逃げることもできずに、苦しい思いをしたと思います。同じように障害がある者としてリオデジャネイロに行く前に絶対に献花をしたいと思っていたので、来ることができてよかったです」と話していました。

このほか、障害のある8歳の男の子を育てる茨城県石岡市の35歳の父親は「事件のことをニュースで見て家族で涙しました。障害のある子どもの親としてとても心を痛めたし、怒りを通り越して言葉になりません」と話していました。

また5年ほど前まで津久井やまゆり園で働いていたという43歳の元職員の男性は「昔働いていた職場でこのような事件が起き、亡くなった方の冥福を祈りたいと思って献花に来ました。入所者の方が心身ともに不安定になっていないか心配です」と話していました。

#### みんなの笑顔奪われた 元職員ら悲痛な声 毎日新聞 2016年7月31日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害された事件は、入所者や園を支えてきた元職員にも大きな衝撃を与えた。入所者を支援するなかで、明るく生きる姿に励まされてきたという元職員たち。「かけがえのない笑顔を奪われた」と悲痛な声をあげ

ている。【国本愛、野口麗子、杉本修作】

「べっぴんさん」には入所者と職員が楽しく過ごす様子が記録されている＝国本愛撮影

1994年6月、園の職員と入所者の絆を示す一冊のアルバムが作られた。タイトルは「べっぴんさん」。施設改修などのため、同年に入所者の約半数が別の施設に移ることになり、「別れの前に」と女性入所者を担当する職員の有志が製作した。約120ページ。言葉話すのが苦手な約50人の女性の思い出などを、職員が入所者に代わり筆を執った。



「花柄のフリルやアクセサリが大好き」「演歌を歌うのが大好き」。人柄を伝える文面は、入所者の性格や趣味を知り尽くしているからこそ書ける内容ばかりだ。遠足の光景や仲間と談笑している姿などの写真もふんだんに盛り込まれている。

「職員に熱意があり、地域もそれに応えていた。本当にいい施設だった」。約30年、同園で働いた元職員の松岡康男さん（82）は語る。入所者の家族からも「平和で温かい園ですね。安心して預けられます」と声をかけられた。

同園では64年の開設以来、積極的に地域住民を職員に採用し、地元と園の橋渡し役を務めてきた。

2001年ごろまで40年近く勤務した甘利ミツ子さん（74）は退職後も毎年8月に園で開催される盆踊り大会にボランティアとして参加してきた。笑顔で迎えてくれる入所者たちに会えるのを今年も心待ちにしていたが、今回の事件で中止になった。甘利さんは「身内を亡くしたような気持ち。ショックで事件を受け止められない」と肩を落とす。

95年ごろまで職員として働き、その後も10年以上ボランティアとして施設運営に参加してきた相模原市の男性（81）は「事件のことはあまり考えたくない」と言葉少なに語った。若い時に学んだ絵画の腕を生かし、入所者の誕生日会には似顔絵を描いてプレゼントした。その時のうれしそうな顔が目に焼きついている。「なぜこんな事件が起きなければならなかったのか」と声を詰まらせた。

園近くに住む元職員の女性（72）は「大変な仕事でも、利用者の笑顔にひかれてみんな続けてきた。命を絶つ権利など誰にもない。職員はみんな利用者を守れなかったことを悔やんでいる」と涙を流した。

## 社説：[相模原殺傷] 最悪に備え安全対策を

南日本新聞 2016年7月31日

神奈川県相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件は、社会に大きな衝撃を与えた。

特に障害のある人や家族、施設関係者にとって、元職員の男による凶行の影響は計り知れない。

19人が刺殺され、26人が負傷した。犠牲者の多さでは戦後最悪である。

逮捕された元職員の動機の解明など捜査が進められているが、防犯対策をどうするか。重い課題が突きつけられている。

これまでの捜査で、障害者に対する容疑者の極めて独善的な考えがあったことがうかがえる。

元職員は、2012年12月に施設の非常勤職員になり、その後常勤職員を経て今年2月に退職するまで3年余り勤めた。この間、不真面目な勤務態度が問題となって再三注意されていた。

辞める直前、衆院議長の公邸に「障害者を安楽死させる」という内容の手紙を持参。施設内でも、「障害者は死んだ方がいい」などと発言していたという。

事件後、問題となっているのが措置入院後の元職員に対する対応である。措置入院は、

自分や他人を傷つける恐れがある場合、強制的に入院させる制度だ。

元職員は、2人の医師から「大麻精神病」や「妄想性障害」との診断を受けた。入院後、症状が和らいだとの医師の判断で9日間で退院した。

しかし、退院後に医療や福祉の関係者が関わりを持つ体制が十分だったとは言えない。

「入院中に精神障害が改善しなかつただけでなく、退院後に薬物を使用した影響の可能性もある」と指摘する専門家もいる。ただ、症状を見極めるのが難しいケースもあり、対応は容易ではない。

事件を受け、厚生労働省は措置入院制度や運用の見直しを検討する方針だ。検証を踏まえ、有効な対策を打ち出してもらいたい。

日本では事件が起きるたびに、動機や社会的な背景に関心が集まる傾向が強い。そのこと自体は大事だが、分析だけでは同様の犯罪が減っていくとは思えないという専門家もいる。

重要なのは、「最悪の事態」に備えることだ。障害者施設はもちろん、子どもや高齢者など社会的弱者が集まる場所の安全対策を充実させる必要がある。

厚生労働省は近く、障害者施設などの防犯対策に関するガイドラインを新たに作成する。

不審者の侵入を防ぐ方法や緊急時の警察、警備会社、関係機関への連絡体制のほか、不審者の発見など安全対策の強化に向けた地域住民との連携だ。急いでほしい。

#### 【産経抄】相模原19人刺殺の元職員が残した妄言「障害者は不幸を作ることしかできない」7月31日

産経新聞 2016年7月31日

殺人容疑で逮捕された植松聖容疑者(右端の緑シャツ) =植松容疑者のフェイスブックより



少年は重度の脳性マヒだった。14歳で詠んだ詩の一節にある。〈ぼくを背負うかあさんの／細いうなじにぼくはいう／ぼくさえ生まれなかつたら／かあさんのしらがもなかつたらうね〉(昭和50年、山田康文『ごめんなさいね おかあさん』)。▼手足が不自由で会話もできない。閉ざされたはずの世界から詩は生まれた。少年の「言葉」に気づいたのは、当時の養護学校で言語訓練を受け持った向野幾世さんである。目をぎゅっとつぶれば「イエス」、舌を出せば「ノー」。目と舌の信号で紡いだ労作だった。▼「表情はことばの宝庫」と向野さんは自著に記している。目や口の動き、涙、洩(はな)、よだれ…。「障害者」と呼ばれる子供たち一人一人の体に「言葉」は宿っていた。抱きしめれば理解できる、と。向野さんを動かしたのは「健常者」と呼ばれる者の職責だったろう。▼「障害者は不幸を作ることしかできない」。相模原市の障害者施設で凶行に及んだ元職員の男は、こんな妄言を手紙に記していた。気づく機会があったはずである。入居者の指先の温もり、目元や口元をかすめるわずかな変化に、「言葉」が宿っていたはずである。▼〈ありがとう息子よ／あなたのすがたを見守って／お母さんは生きていく〉。冒頭の詩に込められた母の愛が詠んだ詩である。それに込めて、少年もさらに自分の詩を紡いだ。〈ありがとうおかあさん〉で始まる詩は続く。〈やさしさこそが大切で／悲しさこそが美しい〉と。▼〈そんな人の生き方を／教えてくれたおかあさん…。少年は詩を完成させてまもなく、短い生涯を閉じた。凶刃に命を絶たれた人たちにも親や友人たちとの間に行き交う〈ありがとう〉があったろう。虚空に消えた「言葉」に耳を澄ませしてみる。

#### 「生計困難者レスキュー事業」長崎で1日から

読売新聞 2016年07月31日

長崎県社会福祉法人経営者協議会(148法人)は8月1日から、経済的に生活が苦しい人に食料などを提供する「生計困難者レスキュー事業」をスタートさせる。

生活保護を受給するまでの期間など、公的支援を受けられない「制度の谷間」を埋めるのが狙いだ。

事務局を務める県社協によると、各法人が自治体などから紹介を受けた困窮者に食材を買って提供したり、光熱水費や家賃を代わりに支払ったりする。現金は支給せず、現物給付を行う。支援するかどうかの判断は各法人に任されており、即日支援もできる。

生活保護受給が始まるまでには手続きを取ってから2～3週間かかるため、これまでは各地の社協やNPO法人が独自に支援し、民生委員が自腹を切るケースもあったという。

事業の財源は、各法人が規模などに応じて年間2万～15万円を出し合う。現在は41法人が参加を決めており、同協議会は100法人を目標に掲げている。昨年度に同様の制度が始まった熊本県では、1年間で166件の利用があったという。

同協議会の神之浦文三会長は、「事業を活用し、制度のはざままで苦しんでいる人を支えたい」と話している。

## 社説：公的年金運用 国民の理解あってこそ 朝日新聞 2016年7月31日

公的年金の積立金の運用で昨年度、約5・3兆円の損失が出た。運用を担う年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）が公表した。

リーマン・ショックがあった08年度（マイナス約9・3兆円）、サブプライム・ショックの07年度（同約5・5兆円）に次ぐ損失の大きさである。

主因は国内外の株式投資の不振だ。14年秋に運用基準を見直し、株式の割合を増やしたことが裏目に出た。

短期の損失が即座に給付に影響するわけではない。自主運用を始めて以降の積立金の運用収益は累計で約45兆円にのぼる。年金は現役世代が払った保険料と国庫負担（税金）で毎年の給付を賄うのが基本的な仕組みで、積立金は給付に必要な財源の約1割に過ぎない。

だが、国債など国内債券を中心に運用していたころに比べ、株式市場の不安定な動きの影響を受けやすくなり、変動幅が大きくなったのは事実だ。

野党は「国民の大事な年金を危険にさらしている」と批判を強めている。それは、国民の間に根強い不安や不信があると見定めてのことでもある。年金制度にとって、国民の理解と納得を欠く状況が広がることは、見過ごせないリスクになる。

株式の比重を高めたことについて、GPIFはあくまで経済情勢や運用環境の変化に合わせた見直しだと強調する。

しかし、世界経済フォーラム（ダボス会議）で「GPIFは成長への投資に貢献する」と述べるなど、運用基準の変更を政権の成長戦略と結び付けて語ってきたのは、ほかならぬ安倍首相だ。「政治主導の見直し」「政権の株価維持対策」との見方が消えないゆえにある。運用の見直しとセットのはずのGPIFの組織改革は積み残されたままだ。今年になってようやく、理事長に権限や責任が集中している体制を合議制に改める改革法案が国会に提出されたが、審議は進んでいない。

これでは、GPIFがいくら「不安にならず、長い目で見守って」と呼びかけても、国民には届かないだろう。

まずは約束した組織改革を早期に実現し、GPIFへの信頼を高めることが不可欠だ。

資産配分についても、どこまでリスクをとるのか、安定重視の運用だと将来の給付水準はどうなるのか、選択肢を示しながら、労使の代表も入った厚生労働省の審議会で改めて議論してはどうか。

国民の理解なくして安心なし。それを肝に銘じてほしい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

